

## 第3回 札幌市生涯学習推進検討会議 概要録

### 1 会議次第

- (1) 第3次札幌市生涯学習推進構想の素案について
- (2) その他

### 2 日時

平成28年(2016年)10月24日(月) 9時30分～11時30分

### 3 場所

札幌市教育委員会4階 委員会会議室

### 4 出席者

#### (1) 委員(11名)

石井委員、臼井委員、大森委員、喜多委員、木村委員、佐久間委員、佐々木委員、竹川委員、平島委員、三上委員、三坂委員

#### (2) 事務局(5名)

山根生涯学習部長、大場生涯学習推進課長、近藤生涯学習係長、齋藤社会教育主事、永山社会教育主事

### 5 開催形態

公開(傍聴者なし)

### 6 主な議事の内容

#### (1) 第3次札幌市生涯学習推進構想の素案について

○資料1について事務局(近藤係長)より説明があった。委員意見は以下のとおり。(各章については委員の発言順)

<第1章、第2章> P1～22

- ・P7「かつて経験したことのない人口減少社会の到来が見込まれることや少子高齢化の進行」とあるが、並列ではなく「少子高齢化社会の進行に伴い、人口減少社会の到来」では。(臼井委員)
- ・P8「価値観やライフスタイルの多様化によっても、地域社会における人と人とのつながりや支え合いは希薄化しており」とあり、価値観やライフスタイルの多様化が悪いことのように書かれているが、本来は悪いことではないので「希薄化の原因」のようなネガティブな書きぶりに違和感がある。(臼井委員)

<第3章> P23～25

- ・ P23 「個人の興味に基づく学びやスキルアップに役立つ学び」は「個々人の関心やスキルアップ」と直しては。（竹川委員）
- ・ P24 「生涯学習関連事業を広めるために」とあるが、まちづくりセンターを活用して生涯学習を推進する旨を入れては。地域づくりを目指しているのであれば、かなり方向性がはっきりする。（竹川委員）
- ・ P24 に「学ぶことに無関心であったり、様々な理由で学習をすることに壁を感じている市民も少なくない」とあるが、無関心であることは必ずしも悪いことではなく、決めつけてはいけないのでは。施策として関心付けするのは良いが、生涯学習の自主性・自立性を考えた場合、無関心で学ばないことが絶対的に悪いと言えない。（佐々木委員）
- ・ 無関心がいけないとは書いていないが、少し強く感じる。「様々な理由で学習することに壁を感じていたり、学ぶことに無関心であったり」と順序を入れ替えては。また、「～たり」を用いるときは「～たり」で受けるのがルール。（臼井委員）
- ・ P23 「1 第3次札幌市生涯学習推進構想で目指す姿」が「生涯にわたる学びが未来をつむぎ 市民がともに織りなすまち さっぽろ」とされているが、非常に静的な印象を受けた。皆さんの議論を聴いていると、「もっとこの10年はこうやっていこうよ」というアクティブな印象を受けたので、「生涯にわたる学びが未来をひらき 市民がともに築き合うまち」くらいの方が、生涯学習としては強くなると思った。（臼井委員）

<第4章> P26～35

※以下、「施策の展開（番号）」の記載は、資料1における「施策の展開」に対応。

- ・ 施策の方向性「1 多世代のニーズに応じた学びの推進」に連なる施策の展開の項目に違和感がある。子どもが主体なのか、親が主体なのかわかりにくい。施策の展開1は乳幼児期の子どもを主語とした内容を連想する項目名だが、本文の中身は親のことを書いている。施策の展開1を「子育て期」とすれば良いとも思ったが、子育ては青少年期にも関わり、難しい。（平島委員）
- ・ 親世代は成人期の多様なニーズに含まれるとすれば、子育て世代は成人期では。混同するとわかりにくくなってしまう。（三坂委員）
- ・ 前回会議で「幼児・青少年期を育む学びの充実」となっていたものを、事務局が

委員意見を踏まえて修正したものだと思うが。（竹川委員）

- ・「各世代がお互いに学び合う」ことがもっと明確に入っていた方が良い。親は子育てしながら子どもから学ぶこともあるし、子どもも大人から学ぶことがある。

（三坂委員）

- ・「親の学び」の要素を、施策の展開1から施策の展開3に移動した場合に、施策の展開1に何が残るのか気になる。それを見て、その場合1を残すべきかを考えることも必要。（三上副議長）
- ・施策の展開1で、子育ては親だけでなく、みんなで、地域で支えようという「子育ての社会化」についての記載が、本文や事業例に必要。「子どもは親が育てなさい」というのが、子育て中の方が孤立する一因になっていると思う。（喜多委員）
- ・施策の展開1～4は成長のプロセス。子育て世代も含めて、一人の人間がどうやって自立した市民になるか、を表していると考えれば、これで良い。（三坂委員）
- ・この分け方で良いと思う。施策の展開1は「育ちを支える」とあるので、主語は親。ただ、「乳幼児期からの」ではなく「乳幼児期における」では。（大森委員）
- ・施策の展開1～4を見た場合、施策の展開1のみ主語が本人でなく親になっている。「親期」を入れれば解決できるのでは。（平島委員）
- ・世代間をつなぐような言葉が入り、各世代が学び合う視点が入れば良いのでは、世代で分けても違和感がないのでは。あくまで親が自分の子どもを育てるものなので、「社会が子どもを育てる」ということを言い過ぎると、逆の意識が生まれてしまうことも懸念される。（三坂委員）
- ・施策の展開1～4は問題ない。社会が子どもを育てるとするのは当たり前の考え方。方向性の文言を工夫しては。「各世代のニーズに応じて連携する学びの推進」など。（竹川委員）
- ・施策の展開名を修正するにしてもしないにしても、「育て合い」「支え合い」など、「～し合う」の観点が必要。（臼井委員）
- ・「各世代のニーズを支え合う学びの推進」など。（佐久間議長）
- ・施策の展開名はこのままの方がわかりやすい。方向性の文言で整理できれば良い。親についての学びを、成人について記載される施策の展開3で、親としての立場のことを書ければ、乳幼児期の子育てに関することと、青少年期の子育てに

関することの、どちらも含めることができる。（佐々木委員）

- ・施策の展開 18 の項目名の「出前講座」の文言が気になる。（竹川委員）
- ・施策の展開 19 の「コーディネート」がわかりにくい。この部分の本質は「学びを誘発する」「学びを活発にする触媒役」では。（竹川委員）
- ・施策の方向性「1 各世代のニーズに応じた学びの推進」について、世代間が支え合う視点や交流する視点は必要。親が子育てサロンに行く大きな目的は、仲間づくりや地域とのつながりづくり。子育て中の方が「孤立しやすい」という現状への言及もあるので、施策の展開 1 に地域とつながる視点を入れたい。施策の展開 3 の成人期は幅広いので、親としての学び、その他の幅広いニーズについても書き込んで本文を厚くしたい。結婚することを恐れている人もいるので、そのような恐れを解消するような学びを成人期で行えれば。（石井委員）
- ・成人期に、親になる前の学び、親になるための学びが含まれると良いのでは。

（佐久間議長）

- ・施策の展開 3 と施策の展開 4 の関連性について、「現役世代」という文言と「生涯現役」という文言がうまくつながっていない。施策の展開 3 で成人期は「現役世代」と定義づけられているが、施策の展開 4 で「現役世代の減少」と述べられた後に「高齢世代は生涯現役」という文言が出てきており、わかりにくい。整理が必要。（臼井委員）
- ・施策の展開 3 や施策の展開 15 に関連することだが、会社に勤めていると会社の価値観のみの生き方になっていることが多い。企業の価値観だけではない、社会的な意識を持つうえでの生涯学習が大事なんだというニュアンスを入れておくことが必要。いろいろな企業で問題になっている「社畜」「企業が全て」という考えをどこかで是正する考えが文言として必要。（臼井委員）
- ・コーディネートについて「触媒役をする」「インキュベーターをする」という誘発する視点が重要。（臼井委員）
- ・施策の展開 12 がコミュニティスクールと同じような書き方になってしまっているので、生涯学習の中での連携ということがわかるようにすると良い。コミュニティスクールで地域の方が入って、子どもにいろいろな活動を提供するというのは学校教育での話。学校を開放して地域の方も学習活動できるのが生涯教育の中での地域連携では。（大森委員）

→「連携」から一歩進み、地域・学校協働という視点もある。（佐久間議長）

- ・施策の展開 13 でまちづくりセンターと情報交換とあるが、場の提供など、もう少

- し積極的にまちづくりセンターを巻き込むような書きぶりが必要。（大森委員）
- ・ 施策の展開 16、施策の展開 17 で「時間がなくて学習できない」人に対し、ICT で学習機会を与える視点の書き込みができれば。（大森委員）
  - ・ 施策の展開 18 にちえりあ市民講師バンクの記載があるが、そもそも市民に知られていないという現状があるので、広報についての書き込みも必要。（大森委員）
  - ・ 施策の展開 19 のコーディネーターについて、「こんなことができる」というその人の身分・肩書を証明するものを新設する視点があれば良い。（大森委員）
  - ・ 施策の展開 21 で指定管理が現状にそぐわないという意見もあるので、むしろ指定管理制度を見直して検討するという記載が必要では。（大森委員）
  - ・ P 4 の家庭教育に関する社会教育法条文の抜粋の中で、子育てにおける親の責任については触れられているので、施策の展開 1 に「子育ては親一人で担うものではない」という文言を入れたい。事業の例にも「子育てを支え合う学習機会の提供」などを入れたい。（喜多委員）
  - ・ 施策の展開 9 について、高齢者の就労支援も大事なので、事業の例に入れては。（喜多委員）
  - ・ 施策の方向性「1 各世代のニーズに応じた学びの推進」の文章に、「特に乳幼児期や青少年期については、それを支えるという意味で親世代の学びが非常に重要視されるので、そこにも視点を置いている」という文言があれば、各展開の親についての記載がスムーズにいくのでは。（木村委員）
  - ・ 施策の展開 2 の 2 段落目で、「子どもたち」が主語なのか、「大人」が主語なのかが曖昧。「子どもの学びに必要なのはこういうことである。そして、この子どもの学びを支えるためにはこういう機会が必要だ。」というように、誰が主体となっている書き方なのかを整理してほしい。例えば「体験活動する機会を作り出していくことが必要です」という部分だが、子どもが学校教育の中で自らそのような機会を作り出していくというのは難しい面があるので、「こういう機会を作り出すことを生涯学習として考えていきたい」や「学校と地域が連携して進めていきたい」というような書き方になるかと。（木村委員）
  - ・ 施策の展開 2 に、ボランティア活動についての記載が必要。（木村委員）
  - ・ 子どもたちは忙しいということもあり、地域が主催する行事に参加しづらいという現状がある。しかし、地域との交流や、地域の行事に出るということは大切なので、そのことについて触れてほしい。（木村委員）
  - ・ 施策の展開 3 で、成人期に求められる要素を整理することで、付け加えるべき要

素が明確になるのでは。職業人、社会人という社会の一員、親世代、地域の一員、人間など、様々な生き方が整理できれば、それに伴い事業の例も整理されるのでは。（木村委員）

- ・第3次札幌市生涯学習推進構想は内容が多岐に渡っており、誰が手にして、誰が自分のものとして考えるのかわからなくなってきた。現実一人の市民として考えたときに、中身を理解して、これから生きる糧にする人がいるのだろうかということも考えながら、市民に向けた構想としたい。（三坂委員）
  - ・コミュニティスクールのような学校と地域の連携を推進するものとして、札幌ではサッポロサタデースクールを実施して、地域の中で学校を拠点とした異世代の学びを推進している。（三坂委員）
  - ・まちづくりセンターは情報交換の場や活動の場所を提供するだけではなく、まちセン自体が地域に積極的に関わられる、コーディネート機能を持つべき。連合町内会・まちづくり協議会・学校がそれぞれに地域づくりをしているが、うまく機能していない印象がある。方向性を示唆する人材がまちセンにいれば、地域づくりはもっと進むし、それを明記することで行政の体制が変わると思う。（三坂委員）
  - ・指定管理制度について、施設の本質をよく理解せずに施設の運営をしているようなところも見受けられるため、指定管理という言葉自体あまり使ってほしくない。（三坂委員）
  - ・第3次札幌市生涯学習推進構想はこれから10年間の札幌市の生涯学習の地図のようなもの。札幌市が宣言するような。（佐久間議長）
- それを一人一人の市民がどれだけ携えていくか、どうやってそのような意識を市民一人一人に持ってもらうかが重要。（三坂委員）
- ・施策の展開1～4の分け方がしっくりこない。札幌市として子育て支援を強く謳っている以上、子育て期、という単語が必要。乳幼児期も意志があるので、そこを括って親についての学びのみとするのは気になった。（平島委員）
  - ・都市像の「世界が憧れるまち」に対応する部分が見つけられなかった。施策の展開22で「世界」「外国」というようなものが入ってきても良い。（平島委員）
  - ・施策の展開1について、「一人でも学べる」とは「一人でも多くの」ということか、「一人で学べる」なのか明確にすべき。（竹川委員）
  - ・施策の展開2「様々な年齢・立場の人々と関わり」の文言は削除すべきでは。入れるなら具体例を入れては。（竹川委員）

- ・施策の展開 4 について、「高齢者や超高齢者社会に関する理解を多世代に浸透させる」という文章は意図が不明。具体的に何を理解させ、また、多世代に何を實現するために浸透させるのかを具体的に言うべきだ。「生まれてから死ぬまでが生涯学習」なので、書くのであれば、具体的なロールモデルを持って市民に示すことが必要。（竹川委員）
- ・施策の展開 5 の事業例「時代の変化に伴い顕在化した課題に関する学習」は良いと思うが、誰がこれを担うのかが大事。自分は、高齢者が担っていくと思う。（竹川委員）
- ・施策の展開 9 で、生涯学習においては経済的自立ではなく、情緒的自立を求めるもの。この文章全体が抽象的で具体性に欠ける。（竹川委員）
- ・施策の展開 10 も、事業例に「札幌の活力を高める産業振興」とあるが、生涯学習が目指す活力を高めるのは産業振興のためではないだろう。どのようにまちの活力を高めるかが見えるように記述することが大事。（竹川委員）
- ・施策の展開 11 について、学習成果を発表しているのを見て、自分も学習しようと思う人がどれほどいるか疑問。表現を工夫してほしい。（竹川委員）
- ・施策の展開 12 について、「学校施設を活用した生涯学習事業」の実施とあり、学校施設を学校教育を受けている者や、地域の社会人による生涯学習の場とするということと思うが、町内会館等の他の施設もある中で、あえて学校施設と書き込む必要があるとは思えない。（竹川委員）
- ・施策の展開 14 について、事業の例に「市民講師による講座等の開設・支援」とあるが、生涯学習の考え方にそぐわない。地域で活動する担い手を紹介し、地域の人々による地域活動を学び合い教え合う機会を支援する。（竹川委員）
- ・施策の展開 18 について、ここで言う「出前講座」が、カルチャーセンターでやっているような内容を展開させることを指すのであれば、書き込む必要はない。また、「市民自身の『学びたい』という希望に応じて学習機会を提供できる」とあるが、生涯学習の考え方では、学ぶことと「学んだらどうするか」はセットになっている。「社会の役に立つために学びたい人」とすべき。（竹川委員）
- ・施策の展開 19 の「コーディネーター」は「触媒役」とすべき。「触媒」という言葉は 20 年ほど前はよく使われた言葉であり、ボランティア活動等を語る文脈に合う。組織を作って何かを行うときは「コーディネート」という言葉でも良いが、生涯学習として地域づくりを行っていくという文脈では「触媒役」の方が、違和感がない。（竹川委員）

- ・施策の展開 21 に「今後も、指定管理者による創意工夫を反映させた事業運営が期待されます」とあるが、これでは指定管理制度の運用目的に照らして疑問が出る。削除すべきである。（竹川委員）
- ・事業の例が、実際の事業につながってほしい。（佐々木委員）
- ・施策の展開 20 及び施策の展開 22 に図書館についての記載があるが、博物館についての記載もどこかに入れてほしい。社会教育三法に博物館法もあり、博物館は重要な生涯学習の場となっているはず。（佐々木委員）
- ・施策の展開 5 について、事業の例に「時代の変化に伴い顕在化した課題に対する学習」とあり、カッコ内で内容が例示されているが、「そのような課題をどうキャッチするか」という視点が重要なので、あえて課題の例示をしないという書き方もある。キャッチの仕方を鍛えていくという視点は、さっぽろ市民カレッジの中にもあるのだと思うが、それを強めていくといったことを言うべき。（三上副議長）
- ・施策の展開 16 にワーク・ライフ・バランスを推進する視点が入っているが、「仕事と生活がどのような関係になっているのか」というのは、成人期や青少年期の市民が学ぶべき事柄・課題でもあるので、そのような入れ方もしてほしい。（三上副議長）
- ・施策の展開 21 「指定管理者による創意工夫を反映させた事業運営が期待されます」という記載について、もちろん指定管理者制度が挙げてきた成果もあるだろうが、課題も既に見えてきている。それを適切に評価・検証して、本当にそういう工夫が反映された運営の形にしていくのが、この先 10 年でやるべきこと。（三上副議長）
- ・施策の展開 20 にある、「知の拠点」や「学びを深める」という図書館に関する視点は大事。これに加えて、活動の支援や、仕事の支援という視点も触れたい。また、図書館と言ってもいろいろなタイプがあり、そのタイプによって果たせる役割も異なるので、図書館の中での役割分担ということも触れたい。（三上副議長）
- ・3つの施策の展開が重点施策となっているが、なぜこれが重点施策となっているのかをもう少し書くべき。重点施策になる理由というのが、大事な今後の施策の根拠となる。（三上副議長）
- ・施策の方向性「1 各世代のニーズに応じた学びの推進」にぶら下がる、施策の展開を「乳幼児期から青少年期を育む学びの充実」「子育て期を豊かに過ごす学

びの充実」「成人期の多様なニーズに対する学びの充実」とすると、子育てを地域で支え合う視点や、親の育ちを応援する学習機会の提供が入る。（喜多委員）

- ・子育て期だけが人生の中の特別な時期ではなく、それぞれがみんな重要であることを考えると、子育て期だけ別に入れる必要はない。細かく分けすぎると、結婚していない、子どもを産んでいない方への差別といった、逆の意識に取られることもあるかもしれない。（三坂委員）
- ・「高齢期を豊かに過ごす学びの充実」とあるので、「子育てを楽しむ学びの充実」もあっても良いように思えた。（喜多委員）
- ・高齢期は社会での活躍を終えての余生の部分として、今の時代を考えると入れるべきだと思うが、子育てというのは社会参加しているまっただ中の人たちなので、そこが意識化される文言は入れるにしても、成人期に含めるべき。（三坂委員）
- ・施策の展開 8 について、札幌や北海道の魅力のひとつは、開拓の歴史やフロンティア精神と思う。開拓の歴史があって、札幌には永山記念公園、時計台、北海道大学といった歴史的建造物もあるので、そこをもう少し入れることで札幌らしさが出ると感じた。（石井委員）

<第5章 構想の推進のために> P 36

- ・基本施策Ⅱの成果指標はどのような意味か。（木村委員）
- 基本施策Ⅱはつながりづくりの観点の施策の展開をまとめた項目なので、施策の結果、「生涯学習が活発になるための施策として『地域で気軽に学びながら、多様な世代が集まって交流を行う、地域のたまり場』を必要としている人の割合」が低くなること、つまりそのような必要性が減じたということを逆説的に成果指標とした。市政世論調査として経年変化を取ってきたものから指標として選んだ。（近藤係長）
- ・たまり場に参加する人が増え、もっとやりたいという人が増えることもあるので、この数値を成果指標として判断できるのか疑問を持った。数値が減ったとしても、いろいろな要素が絡むのではと思う。（木村委員）
  - ・数値化した成果指標を設定したこと自体はわかりやすく良い。しかし基本施策Ⅱの成果指標については目標値も 3.7%の変化としており、他の二つが7%や10%近い数値であることから違和感があり、検討が必要。（平島委員）
  - ・ここでのアンケートとは、どのような取り方をするのか。（大森委員）
- 平成 22 年度、27 年度は市民の声を聞く課で行っている市政世論調査の中で、生涯

学習に関わるテーマを設定して実施した。経年変化を取れるものということで設定しているが、基本施策Ⅱについては難しいと感じている。（近藤係長）

→生涯学習に積極な方々をサンプルとすると、どのようになるのか興味があった。

（大森委員）

- ・アンケート調査が、単なる人気投票のようになってしまっており、実態とはだいぶ違うように思う。統計学とリンクさせた質問調査票を作り、仮説を検証していくことが必要。（竹川委員）
- ・個別の事業評価自体は、行政の内部で毎年行われている。この成果指標は構想の見直しをする際の一つの目安となるが、これで構想の全てを評価するものではないというのは覚えておきたい。（佐久間議長）
- ・基本施策Ⅱの成果指標について、別な指標があると良いが、このままにするとした場合、複数のシナリオを作るのはどうか。例えば、「生涯学習をしている人」が増えれば、必要としている人の割合は増える可能性が高いので、その場合は「たまり場を必要としている人の割合」の目標は高めの数値を設定し、「生涯学習をしている人」が減った場合は別の数値を設定するなど。（三上副議長）
- ・仮説を立ててアンケートを取らなければ、ほとんど意味がない。アンケート調査票を作成する段階から論理的に整理すべき。（竹川委員）

## (2) その他

○次回会議は来年2月を予定。